



MUSASHINO^{Vol.120} *for* TOMORROW

巻 頭

芸術と才能と運命

藤谷 治 (小説家)

卒業生の留学ライフ

美しい人生のために、
今すべきこと

鳥谷尚子

(声楽 / ウィーン国立音楽大学大学院研究科オペラ研究領域在籍)

表紙：田代慎之介 (ピアノ)

January 2017
vol.120

謹賀新年

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬



平成27年着工の本学園「江古田新キャンパスプロジェクト」は、いよいよ終盤を迎え建設工事もほぼ完了し、1月に官庁による法的検査を受けるのみとなりました。これまでに近隣の方々のご理解、ご協力をいただき、静かな住宅街の中心に位置するにもかかわらず、建坪率、容積率ともにほぼ満杯の難工事を無事故で施工することができました。近隣住民の方々、また建設を担当した(株)大林組の関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

また、この2年間、大学の全授業を埼玉県の入間キャンパスで実施したために、この間、教職員の皆様と学生諸君にもご迷惑をおかけした向きもあろうかと思いますが、温かいご理解をいただき、間もなく平成28年度の学事も無事終わろうとしております。このことにつきましても、深く感謝

を申し上げる次第です。

「江古田新キャンパスプロジェクト」の完了により、体育館とグラウンドを除き音楽大学として考え得る最新の施設・設備すべてを、江古田キャンパス内に機能別に配置することができ、今後、教育・研究上、経営上、大きな成果をもたらすものと期待しております。新校舎が擁する諸施設・設備等につきましては、本誌に逐次掲載してまいりましたので、ご覧いただければ幸いです。

また、新校舎の完成と同時に、平成29年度から従来の学科組織を再編・統合し、演奏学科(3コース)と音楽総合学科(4コース)の、2学科7コースで構成する新教育体制がスタートいたします。これに伴い、カリキュラムを抜本的に改定して専門科目と関連科目をさらに充実し、学生諸君

一人一人が自分の目標に向かい、段階的に高度な専門性や表現力を身につけるよう、一層の工夫を加えました。更に、今回の改編に併せ、現在の通年制を見直し、年度を2つの学期に分けて取得単位を学期ごとに完結させる「セメスター制」を導入いたしました。これらの改定につきましても、本誌119号をご参照ください。

本学では今後とも、音楽大学に求められる社会的な役割や、学生の多様なニーズに応える教育改革を継続的に推進し、音楽を基本とし幅広い分野で活躍できる有能な人材を育成してまいります。

本年も何とぞよろしくご支援、ご鞭撻の程お願い申し上げます。



未来を奏でる武蔵野の新たなステージ
江古田新キャンパス、
今春開幕。



①南東外観 ②エントランスホール(内観) ③ベートーヴェンホール ④ブラームスホール ⑤モーツァルトホール ⑥キャンパスレストラン
⑦展望ラウンジ ⑧図書館 ⑨楽器博物館 ※江古田新キャンパス完成予想CG (③のみ実写)



芸術と才能と運命

藤谷 治 (小説家)

高校の音楽科に通う主人公と仲間たちの熱く切ない青春の日々を綴った、音楽小説の名作『船に乗れ!』。本誌116号でも、書評家の松田哲夫さんがこの作品を取り上げて推薦して

います。著者は、ご自身も高校の音楽科で学んだ経験をお持ちの藤谷治さん。青春の一時期を音楽に打ち込み、その素晴らしさと厳しさを知る藤谷さんから、我々に向けての力強いエールがとどきました。



藤谷 治 Osamu Fujitani

1963年東京生まれ。洗足学園大学附属高校音楽科、日本大学芸術学部映画学科卒業。2003年『アンダンテ・モーツァレラ・チーズ』でデビュー。2014年『世界でいちばん美しい』で織田作之助賞受賞。他に、音楽高校を舞台にした『船に乗れ!』、新日本フィルの実話をもとにした『あの日、マラーが』など。最新作『花や今宵の』。

主人公サトルと僕

僕の人生における最も華やかな瞬間は、2013年の暮れに訪れた。渋谷の巨大劇場で、自作『船に乗れ!』が舞台化されたのである。

これは凄まじい規模の作品だった。舞台の中央にオーケストラが、出ずっぱりで控えている。オーケストラの中央を斜めに上がる坂が据えられ、登場人物はオーケストラの中を横断、縦断して登場し退場する。ミュージカル俳優も、ストレートプレイの俳優も、歌手やアイドルの人たちもキャスティングされ、宮川彬良氏の手腕

によって編曲されたバッハの「無伴奏チェロ組曲」やメンデルスゾーンピアノ・トリオに乗せて、菅野こうめい氏の創り上げた歌詞を歌っていくのである。

僕は取り乱した。正気を保つのに精一杯だった。

嬉しさに興奮したというだけではなかった。もちろん嬉しいのには違いなかった。机に向かって日を送っているだけの小説家が、いきなり美男美女にセンセイと慕われるのだから、かたじけなくも光栄である。台本の読み合わせでも稽古場にお邪魔させて貰っても、上演期間中はなおのこと、僕のほっぺたは緩みっぱなしであった。

だが心の底にはヘラヘラ笑っているだけでは済まないものを、ずっと抱えていた。それは舞台とぴったり比例するほど規模の大きな、矛盾であった。

その矛盾は、稽古をしている時に、主人公のサトルを演じた山崎育三郎さんから尋ねられたこの質問に、象徴的に表れていた。

「サトルは、どうして音楽を辞めたのですか？」

『船に乗れ!』は音楽高校を舞台にし

た青春小説、という形をとっている。主人公の津島サトルは、鼻持ちならない少年チェリストとして登場し、恋愛や演奏や短い留学、それに傷心と挫折を経て、チェリストとして教育を受け続けるのを断念する。

つまりこの小説は、音楽家になれなかった人間を描いているのである。

そんな人間を、山崎さんや福井晶一さん(成人したサトルを演じた)といった、日本で最も優れたミュージカル俳優が演じるのである。

舞台の規模と比例する矛盾、というのはいくつかの意味だ。演じる俳優が優れていなければいけません、舞台を支えるスタッフが才能豊かであればあるほど、そして舞台が華やかであればあるほど、そこにスポットライトを浴びて立っている姿が、実際にはどれほどそのスポットライトから遠い存在であるかを、僕は見せつけられるのだ。なぜなら『船に乗れ!』の鼻持ちならない少年チェリスト、サトルとは、僕自身の高校時代をモデルにした人物であり、僕はサトルを、架空の物語のために創作されたキャラクターだなどと、突き放して眺めることはできないからである。

しかもとどめを刺すように、プロ

デューサーと演出家は、舞台化にあたって原作にあるのとまったく同じ音楽を、オーケストラで演奏することに決めた。そして原作にある音楽は、すべて僕が高校時代に練習したり、実際に演奏会で弾いたものばかりなのである。『白鳥の湖』や『レ・プレリュード』が、高校時代の僕らのそれとは比べ物にならない、しっかりした演奏で鳴り響くたびに、僕は正体不明の汗が身体から噴き出るのを感じた。

50歳を過ぎた僕が、18の時の挫折に苦しめられた。学費やレッスン料を出してくれた親に対する申し訳なさばかりではない。あの頃の自分が、練習曲集のまださらっていない後ろの頁を開き、その譜面ヅラを見ただけで「とても無理だ!」と絶望したことや、弓を持ち上げる右手の重苦しさ、聞き取れない聴音の臨時記号や無味乾燥なソルフエージュ、そういった音楽技術の階梯にある苦しさを、ついに乗り越えられなかった弱さが、30年以上経った今も自分の中にわだかまっているのを、自覚しないわけにはいかなかったのである。

サトルは、どうして音楽を辞めたのですか? という山崎さんの問い



は、彼が役を自分のものにするために必要な疑問であつたろう。俳優というのはこんなにも真面目に努力を重ねるのかと、こちらがうろたえてしまうほど、彼のまなざしは真摯だった。

サトルは才能がなかったのです、あるいは、だらしがなかったのです、と答えたとしても、間違いではなかっただろう。だがそんな程度のことを、彼は尋ねているのではなかった。原作に書いてあることを訊いているのではない。いってみれば、彼は「サトルが音楽を辞めたこと」に、作者である僕は、一体何を託していたのか、と問いかけたのだと、僕は思った。

僕の答えは、答えた自分にも思いがけないものだった。

それがサトルの運命だったからです、と僕は答えた。彼は音楽を勉強して、限界を痛感して、あらたな人生を始めなければならない、そういう運命だったのです。

完全な音楽、不完全な人間

僕にとって音楽は酷薄な芸術である。絶対に手が届かない。

完全なものというのは、現実には存在しないといわれるが、音楽家にとって「完全」は日常の中にある。楽譜とは「音楽の完全」である。それがどんなにださい、どうしようもない音楽であろうと、楽譜はその音楽に



▲ 武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会 (2016年12月5日/東京芸術劇場 コンサートホール)

については「完全」なのである（ここで僕は、演奏者に即興性や任意性を求める種類の、現代音楽の楽譜については顧慮していない）。

しかも楽譜というのは、実際は単なる記号の羅列であって、それ自体は一音も発しない。これは完全なるものがもたらす究極の逆説だ。音楽家はその逆説を、毎日譜面台に置いて、自分の前に広げている。逆説に立ち向かっている。

楽譜は音楽を完全には表現しないとか、本当の音楽は楽譜のさらに先にある、といった考えを、僕は採らない。モーツァルトのフェルマータやブーラングが器楽曲にも書き込む「プレス記号」で、どの程度の間合いを取るのがふさわしいのかは、楽譜に書いてないじゃないかという人もいるだろう。だが音楽家なら知っているはずだ、あの間合いの絶妙さを、楽譜はおのずと示している、と。楽譜の指示を読めていない演奏家には、楽譜の指示に逆らうこともできない。作曲家であれば自作を完全に演奏するというのも幻想である。

音のない完全な音楽である楽譜に
対面し、その完全に向かっていくの



が、音楽家の役割である。そして音楽家は限界のある、不完全な、単なる一個の人間である。なんと厳しい役割だろう。プラトンのようなアイデアの領域にある楽譜を、現実世界の中で、具体的な時間芸術として現出させなければならないのだ。それは不可能を可能にしようとする営為に等しい。

だから僕に音楽は続けられなかった……、とってしまえば、それはもちろん理由の後付けになる。18歳の高校生だった僕に、こんな哲学的考察ができたとは思わない。だがあの頃の僕の音楽に対して感じていた圧迫や、意欲の減退、不安や恐怖を言葉にすれば、こうなる。

そして言葉にしてみると、自分でもはっきりする。こんな風に考えるのは、音楽の才能がない証拠である。ここに書いた、楽譜の完全性に対する音楽の不可能性（なんじゃそりゃ）などというのは、アキレスは亀に追いつけないんだから走るのをやめますと、陸上競技の選手がいうようなものである。亀に追いつけないのは走らないからだ。走れば追いつく。いくらゼノンが距離を2分割したって、実際に走る人間には無意味である。

にもかかわらず、僕にとって音楽とは、今でもやはり酷薄であり無情である。実は『船に乗れ!』を書き始めた時から、チェロとピアノを再びこっそりと練習するようになった（一種の「取材」として）。30年前に較べて、チューニングマシンは安価だし、レッスンを受けるのは容易だし、練習方法も発達している。日本の西洋音楽に対する環境はとても良くなっていると感じる。優れた音楽家が多く輩出されているのも頷ける。だがそれでも、やはり僕の指は思うように動かないし、腕は疲れやすく、暗譜は苦しい。自分の出す音を、許すことができない。僕に音楽は、やはり無理だったのだ。



芸術に立ち向かう姿勢

僕は音楽を辞めた。それから20数年後に、小説家になった。

小説を書くのも、なかなか苦しい。くだらないものは書きたくない。もっとよくなるはずだと思う。だができない。せめて今の自分にできるだけのものを、と努力しても、書き上げたものには常に、疑念や不満が残る。

それでも書き続けている。続けられている。音楽を、プロになるまで修練できなかった僕が、小説は石にかじりつくようにして今も書いている。

それは才能の問題だろうか。僕には音楽の才能はなかったが、小説の才能はあったということなのだろうか。小説家として10数年、刃の上を渡るがごとき世渡りをしてきて、今の僕は確かにいうことができる。それは断じて才能の問題ではない。ごく客観的に自己の作品を判断すれば、僕に小説家の才能はないと考えるほかはない。

人間は才能のあるなしで、芸術に立ち向かうわけではないのだ。僕が音楽家になれなかったのは、才能がなかったこととは無関係である。ただ僕が、音楽に立ち向かわなかったからである。僕が小説家であるのは、小説に立ち向かっているからである。

その「立ち向かえるかどうか」を才能というのだ、という人もいるかも



しれないが、そうではない。それは「姿勢」だ。あらかじめ自分の中にあるものではないのである。僕は音楽に立ち向かう姿勢を持とうとしなかったことを、悔恨と共に思い返さなかった日はいまだ一日もないから、小説家を目指して小説を書いていた20数年間、「姿勢」だけは失うまいとしていた。今もしている。天与の才能がないのが明らかであれば、自力でそれに近いものを捏造するしかない。

一方で僕は、長く音楽と小説の世界を傍から眺め続けていた人間として、才能のある人間が必ずしもその才を存分に発揮し続けるわけではない事例も見てきた。どうやら才能というのは、潮の流れのようなものらしい。才能のある人間は、その潮の上

に乗っかって進む。その流れが人生行路を滑らかに押していってくればいいが、潮は止まることも、逆流することもあり、時には渦巻のように乗っかっている人間を呑み込んでしまうこともある。才能という潮目が読めなくなって、どうしたらいいかも、何が起こったかも判らず、右往左往して朽ちていく人間を、僕は何人か見てきた。「才能」という言葉は、結局のところ、一本道を進もうとする人間を惑わす、幻影に過ぎないのではないかとさえ思う。

自分に芸術の才能があるかないか、そんなことに思いわずらう必要はまったくない。一個の限界ある人間として、芸術に立ち向かっていくよりほかにない。立ち向かう姿勢のあるうちは、才能があろうとなかろうと、その人は芸術家である。

音楽家としての芸術家にはなれなかったが、僕は小説家として、なんとか芸術家であろうとしている。なぜ

小説だったのか。なぜ音楽ではなかったか。

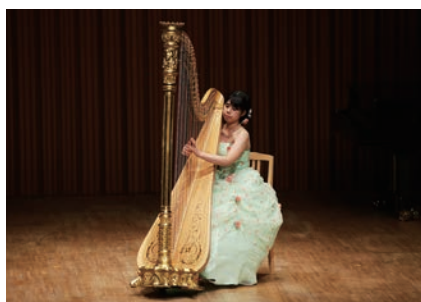
運命だったんだ。そう思い定めるしかない。選べるものではなかったのだから。選べたのなら、僕は音楽を選んでいただろう。

音楽を今まさに勉強している学生には、苦しいことも多いだろう。人の技能を見て焦ったり、自分の非才を嘆くこともあるかもしれない。そんな時、あなたは自分を信じていい。その苦しさはまさしく、あなたが芸術に立ち向かっている証拠なのだから。



❖❖❖ ニュー・ストリーム・コンサート29 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～ ❖❖❖

2016年11月17日 トッパンホール



三谷真珠子(ハープ)



菅田小夏(クラリネット)



市村ひかり(ピアノ)



林 麗子(ピアノ)



清水智紗子(ソプラノ)



坂口秀臣(ピアノ)

美しい人生のために、 今すべきこと

鳥谷尚子

(声楽／ウィーン国立音楽大学大学院研究科オペラ研究領域在籍)

今回文章を寄せてくださったのは、2015年にウィーンに留学し、昨年10月よりウィーン国立音楽大学大学院研究科でオペラを中心に学んでいる鳥谷尚子さん。言葉の壁や多彩で厳しい授業・稽古に、毎日が悪戦苦闘の連続とのこと。それでも、大学、大学院と武蔵野で学んだ経験を活かし、またかつて師から贈られた言葉を胸

に、夢に向かって充実の日々を送っています。留學生生活のただなかにいる鳥谷さんの体験談は、きっと同じように留学を志す後輩の皆さんの参考になるでしょう。

海外で気づけた 新たな可能性

大学院2年生の夏に、初めてヨーロッパでレッスンを受ける機会をいただきました。初めての海外でのレッスンに戸惑っている中、突然先生から、メゾソプラノの私が歌ったこともないソプラノのアリア“Vissi d'arte”を歌うよう指示されました。今までチャレンジしたこともない曲でしたが、いざ歌ってみると、今までに感じたことのないほど伸び伸びと歌うことができました。

そして先生から「君はまだ何でも



▲ 世界屈指のオペラハウス、ウィーン国立歌劇場

できる年なのだから、ファイターのように進んでいこう。人生とは美しいものなのだから」と、とても素敵な言葉をいただきました。異国の地で空気感と初めて挑戦した楽曲ということも相まって、今までに感じたことのない開放的な気持ちになったことを覚えています。この経験から、



鳥谷尚子 Shoko Toya

島根県松江市出身。2010年武蔵野音楽大学声楽科卒業、2012年同大学院音楽研究科修士課程声楽専攻修了。声楽を田口宗明、横山修司の各氏に師事。2011年度第4種福井直秋記念奨学生。武蔵野音楽大学オペラ公演『魔笛』侍女Ⅱ役で出演。第65回全日本音楽コンクール全国大会大学一般の部第1位及び日本放送協会賞受賞。第83回都市対抗野球大会開会式(東京ドーム)にて国歌独唱。武蔵野音楽大学附属音楽教室講師を経て、2015年よりウィーンに拠点を移し、演奏活動を開始。2016年10月よりウィーン国立音楽大学大学院研究科オペラ研究領域在籍。C.Meier、R.Nicklerの各氏に師事。2017年8月5日から27日にシェーンブルン宮殿劇場にて、ウィーン国立音楽大学オペラ公演『フィガロの結婚』マルチェリーナ役で出演予定。



▲ ウィーン郊外にある世界遺産のシェーンブルン宮殿。この奥にウィーン国立音楽大学がある



▲『カルメン』音楽稽古の様子（左から二人目が鳥谷さん）

私は今まで自分で自らの殻を勝手に閉ざしていたことに気づき、これからまだまだいろいろな世界に触れてみたいという気持ちに変わっていききました。これが留学を志す大きなきっかけとなりました。

ウィーンでの言葉の壁

武蔵野音楽大学では田口宗明先生の指導の下、オペラアリアやドイツ歌曲を中心に歌っていたこともあり、それらのどちらかが身近にある、ウィーンに行ってみたくと強く思うようになっていきました。そして、2015年6月にウィーンでの留学生活がスタートしました。

この留学の中で、一番苦労したことはやはりドイツ語です。レッスンや稽古が全てドイツ語なのは当たり前ですが、イタリア語やフランス語の曲を歌うためにもドイツ語で理解し、説明する必要がでてきます。そのような環境にあたふたしていると、いつの間にか稽古もどんどん先に進んでしまい、疑問点を疑問のまま残してしまうことになります。そうならないためにも、語学の勉強は常に続けながら、稽古では吸収できることを全て吸収するために積極的に発言を行うことを心がけ、言葉の壁と日々戦っています。

武蔵野での経験が原動力に

ウィーン国立音楽大学では、個人の音楽稽古だけでなく、クラスでのアンサンブル稽古、コレペティトールによる歌唱・言語の指導、演出家との実践的な舞台稽古、演出専攻の学生とのシーン作成授業など、多種多様な稽古があります。それら通常稽古に加え、年に何度か参加する予定のオペラの稽古などは、夜遅くまでかかる真剣勝負の場となります。

これらの稽古に関しては、武蔵野音楽大学大学院で初めてオペラを全幕勉強し、オペラ公演“魔笛”の舞台に立てたことが、大きな経験として

役に立っています。その当時は自分の未熟さに大いに悩みましたが、先生方に助けられながら努力し、成果に結びつけた成功体験があったことで、ウィーンでも堂々と稽古に臨むことができていますと実感しています。

周りは世界中から集まった才能のある人ばかりですが、武蔵野音楽大学での様々な経験が私を彼ら彼女らと対等なフィールドへと押し上げ、切磋琢磨できていると感じており、今はとにかく音楽にどっぷり浸かれるこの環境に感謝しながら、チャンスをつかめるように日々努力をしています。私がウィーンで歌う基礎を築いていただいた武蔵野音楽大学と先生方に、大変感謝しております。ありがとうございます。

留学を希望する皆さんへ

一番大切なことは、自らの目標に向かう強い気持ちです。くじけそうになっても決して目標を見失わないこと。もちろん私も留学するにあたってさまざまな不安要素がありましたし、一人ではどうにもできないことがたくさんありました。それでも、



▲ 煌びやかな聖ペーター教会。2016年11月、この教会でのコンサートに出演

立ち止まったらそこまで。とりあえず進むしかありません。留学をすることが必ずしもいいことであるとは言えませんが、ただ私自身は留学期間、いろいろな窮地に追い込まれた時に、その都度自分を見つめ直す良い機会に巡り合い、良い方向に自分

自身が成長できたと実感しています。ヨーロッパでは、アジア人が一流の舞台に立つということは難しく、私自身上手いかないことの方が多いのが現実です。それでも舞台に立ち続けている人は、皆さん共通して、真摯に音楽に向き合ってきた方ばかり

です。目標は人それぞれですが、実現している自分を想像すれば、おのずと今やるべきことが見えてくるはず。私も留学して2年目、これからまだまだ試練が続くと思いますが、かつて先生からいただいた言葉の通り、一つひとつにファイターのように立ち向かっていきます。

今後の夢、抱負

これからも出来るだけ長く、大好きな歌を歌い続けていきたいと思っています。そのためには、まだまだ必要なテクニックを磨き続けていかねばなりません。演奏家には終わりがなく、自分が何年後どの環境にいても、歌を好きで居続け、自分の音楽を追究することが、私にとって一番大事だと思います。そのためにあらゆるものを吸収し、演奏家として日々成長していきたいです。自分の人生を美しくするために。



▲ 都市対抗野球大会（東京ドーム／2012年7月）開会式で国歌独唱をする鳥谷さん

音楽の万華鏡 37

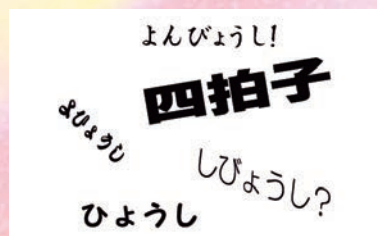
拍子

「四拍子」と書いてあったら、何と読むだろうか？音楽大学の学生なら、「よんびょうし」と読むであろう。一小節が四拍からなるリズムを表す。しかし、日本の伝統音楽の世界で「四拍子」と書いてあると、事情は異なる。まず、読み方がひととおりではない。

雅楽の世界では、これを「よひょうし」と読み、四小節からなるリズムパターンを意味している。たとえば、「早四拍子（はやよひょうし）」は、二分の二拍子で四小節からなるリズムパターンのことを、「延四拍子（のべよひょうし）」は、二分の四拍子で四小節からなるリズムパターンのことを表している。またそのパターンの開始点（のみ）で打たれる太鼓の打音を示す記号のことも「拍子」という。

能の世界で「四拍子」という文字を見たら、これは「しびょうし」と読まなければいけない。大鼓（おおつづみ）、小鼓（こつづみ）、太鼓、そして笛の四種の楽器の合奏形態のことである。西洋音楽のQuartetに相当するといつてよい。そもそも「拍」という漢字の訓読みは「うつ」であり、ここでいう「四拍子（しびょうし）」は、四種類の打楽器という意味である。大鼓、小鼓、太鼓はいいとして、笛は打楽器ではないではないか、と思われる向きもあるかもしれない。しかし、能の笛は、あまり旋律的な動きをしない。むしろ他の打楽器のリズムをあしらったり、飾ったりするような使われ方をする。だから、能の四拍子は、基本的にリズムアンサンブルであり、笛も、その一員であると考えるのである。

単に「拍子（ひょうし）」といった場合、雅楽では「笏拍子（しゃくびょうし）」という楽器の名前に使われることもある。お雛様の男雛が持っている細長いしゃもじのようなものが笏である。あれを縦に半分に割って、拍子木のようにたたいて使う



ものが、笏拍子で、大和朝廷以来の音楽である国風歌舞などで用いられる。「拍子」は楽器だけでなく、ときにその楽器を担当する演唱者のことという。

さらに、「拍子を踏む」という言い方がある。これは、能や日本舞踊で使われるもので、足拍子のことである。

このように、伝統的な日本音楽の世界でたくさんの意味がある「拍子」だが、近代に西洋音楽が導入されたときに、meterの訳語としてもmeasureの訳語としても用いられることになった。が、それについては、稿を改めることにする。

薦田治子（本学音楽学教授）

竣工に向けラストスパート！

一昨年夏に旧校舎が解体された後の新キャンパス新築工事をマラソンに例えるならば、昨年7月の躯体工事の完了が丁度折り返し地点であったといえます。竣工というゴールに向けた残りの仕上げ工事（内外装工事）の進捗状況について、新築5棟と改修されたベトーヴェンホールの計6棟を棟ごとにレポートします。

キャンパスのコア 「リストプラザ」にあふれる陽射し

夏の終わりを告げる2016年9月初旬に、長らく重量物の揚重に使用されていた3台（当初は4台）のタワークレーンが解体され、また施工機械・車輛の走行等に使用されていた仮設構台が、「リストプラザ」と命名される中庭型広場（サンクンガーデン）への高さ8mを超える9本のカツラの植樹を最後の役割として、撤去されました。それにより、太陽光がプラザ全体に差し込み、建物に貼られたオーダーメイドの特注タイルは、天候・時間により様々な表情を見せるようになりました。

4つのホールで構成されるN棟（北棟）では、7月初旬よりウィンドアンサンブル、コーラス、オーケストラの各リハーサルホール、そして新モーツァルトホールの順に並行しながら内装工事が進められ、11月初旬に全て完了しました。これらの各ホールは天井高が約6mと高いため、移動可能な「ローリング足場」と呼ばれる仮設足場が組み立てられ、繊細な天井や壁の装飾が施された後、音響試験を経て性能の面でも満足できる仕上がりとなりました。

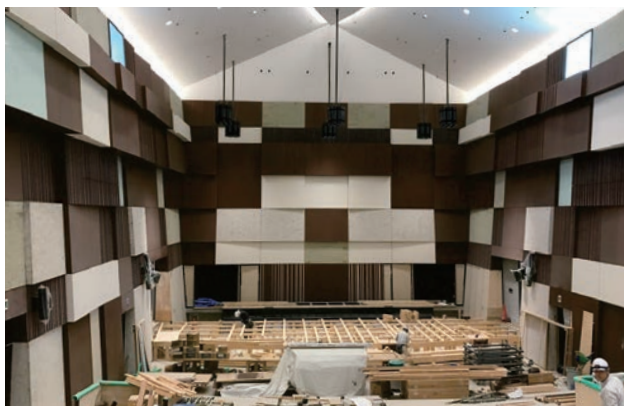
一方、7月初旬に着手されたブラームスホール棟の内装工事は、実に約半年の期間を要する作業になり、最終仕上げ（床フローリング及び客席設置、舞台装置）は



▲ キャンパス全景空撮 — 前日降った雪が一部見られる（平成28年11月25日）

12月下旬に完了しました。独創的でありながら落ち着いた雰囲気を醸し出している壁の仕上げには、モザイクタイルや天然木質パネル、格子状のリブ材、ガラスや大谷石など多様な材料が使用され、ホールの音響性能を最大限に引き出しています。

▶ ブラームスホール ホワイエ
（平成28年11月26日）



▲ ブラームスホール内観（平成28年11月26日）

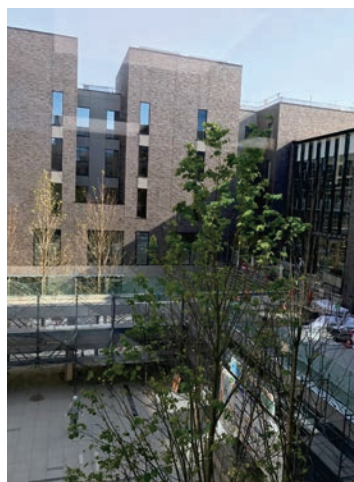


▲ モーツァルトホール内観（平成28年11月26日）

受電により“生きた建物”に

リストプラザを取り囲む様に配置されたC棟(中央棟)、E棟(東棟)、S棟(南棟)の3棟については、8月のお盆明けから9月までの期間、天候不順の関係で外部のタイル張りや塗装工事ができる期間が非常に限られていました。これにより、工事期間の中で最も注意を払う外部足場の解体作業が10月末までの順延を余儀なくされましたが、幸い躯体工事が順調に進んでいたため全体の工程には影響を及ぼさずに、全ての外部足場の解体を無事に完了させる事が出来ました。

建設工事の重要な過程として「受電」があります。施



▲ リストプラザ (平成28年11月26日)

工者(今回は株式会社大林組)にとっては、着工当初から受電日を想定し、逆算しながら工事を進めていく程の大きな目標であり、それまでは只の箱でしかなかった建築物が、受電の瞬間から「生きた建物」となるとも言われています。10月3日、無事にその

日を迎えました。

E棟、C棟には大中小150余りの練習室、レッスン室が配置されています。仕上げ工事が完了した部屋はそれぞれ

施錠を施し、引き渡しの時まで管理されていきます。またE棟の地下1階にはキャンパスレストランがありますが、11月中旬にイギリスの著名なイラストレーターであるケリー・レモン氏が来日し、2週間に渡り現場で直接壁面にアート作品を作画しました。

リストプラザからアクセスするS棟1階のメインロビー吹抜け天井面には、大中小3体のリング照明が10月に配置され、武蔵野音楽学園の新しいロゴマークをイメージした立体感のあるアクセントウォールとあわせ、大学の顔に相応しいフォーマルな空間を生みだしました。また同棟地下1階の楽器博物館では、12月に展示什器の設置が完了いたしました。

▶ メインロビーのリング照明とアクセントウォール (平成28年11月26日)



▲ キャンパスレストランのアート作品前
ケリー・レモン氏と福井直昭副学長
(平成28年11月30日)



巨大シンボルツリーを植樹

6月初旬に着手したベートーヴェンホールの大規模な耐震工事は10月中旬に無事完了し、また同ホールのホワイエリニューアル(天井壁・ホール入口の扉の改修、避難経路の防火シャッター等の更新)、エレベーターの新設、トイレ他内装工事は12月までに全て完了いたしました。

11月初旬には工事の終盤となる外構工事も本格的に始まり、敷地南東に10mを超えるシンボルツリーのケヤキを植樹しました。この重さ約8トンもの巨大ツリーは大型移動式クレーンにより植えられましたが、その工事の様子はご近隣の方々も興味深くご覧になられていました。江古田駅からアプローチするこの敷地南東の一角は、オープンスペースも広く配置された周辺地域に開かれた

空間として、生まれ変わりました。

施工手順の関係で最後となったエントランスホールの鉄骨工事も10月から開始し、ブリッジが中空に浮かぶ総ガラス貼りの、キャンパス内に入る事が楽しく思えるような空間として12月中旬に完成いたしました。

竣工までは、いよいよ残すところ2017年1月からの各種官庁検査のみとなりました。新しいキャンパスの全貌がもうすぐ皆さんにお届けできる予定です。

▶ S棟・エントランスホール・E棟外観(平成28年11月26日)



多彩な音楽、多彩な感動、秋の演奏会

深まりゆく秋の季節、今年度も武蔵野音楽大学ならではの多彩なコンサートが開催されました。

まず11月5日には低学年生で構成される武蔵野音楽大学シンフォニックウィンド オーケストラ演奏会（バッハザール、指揮＝前田 淳准教授）が開かれ、吹奏楽の名曲を若々しいリズムと爽やかなハーモニーで演奏①。11月9日にはアルスルフ・フォン・アルニム 本学客員教授によるピアノ・リサイタル（バッハザール）。入間キャンパスの自然をこよなく愛する教授は、そこからインスピレーションを得たかのような深い音色で、ベートーヴェン、シューベルト、リストの作品を奏で、聴衆は静かな余韻を楽しみました②。11月14日の武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会（練馬文化センター大ホール、指揮＝栗山文昭教授、片山みゆき講師）では、ルネサンスと現代の作品を、また第2部では宮澤賢治生誕120周年記念として、林 光作曲：音楽劇《かしわばやしの夜》

を上演。演出・照明にも工夫を凝らし、台詞を交えながら歌うユニークな作品を、学生たちが熱演しました③。

11月17日のニュー・ストリーム・コンサート29 ～ヴィルトゥオーソ学科演奏会～（トッパンホール、写真 P.5）には、ハープ、クラリネット、声楽、ピアノ専攻の学生6名が出演。日頃の研鑽の成果を発表し、温かい拍手をいただきました。11月20日には“第7回 音楽大学オーケストラ・フェスティバル 2016”が開催され（東京芸術劇場）、本学は時任康文講師の指揮で、リムスキー＝コルサコフの《シェエラザード》を壮大に演奏。続いて11月25日のオペラコース試演会（バッハザール）では、チマローザ《秘密の結婚》を上演、積み上げてきた練習の成果を演じました。

12月3日と5日には、管弦楽団演奏会がバッハザールと東京芸術劇場で開催されました。今回はヨーロッパの歌劇場で活躍中のルドルフ・ピールマイヤー客員教授を指揮者に、また NHK

うたのおねえさんとして活躍した神崎ゆう子さん（本学卒業生）をナビゲーターに迎えて、前半はオーディションに合格した学生、卒業生たちのソロや重唱によるオペラの名曲を、後半には管弦楽でムソルグスキー（ラヴェル編）組曲《展覧会の絵》を演奏し、華やかな雰囲気がホール中にひろがりました④。

12月14日にはウィンドアンサンブル演奏会（東京芸術劇場）が、米国吹奏楽界の重鎮、レイ・E. クレーマー本学名誉教授を指揮に迎えて、日本初演を含む吹奏楽のオリジナル曲、さらにフィナーレにはレスピーギの《ローマの松》より〈アッピア街道の松〉を演奏し、その壮大なサウンドで観客を魅了しました⑤。そして12月19日には合唱団演奏会（指揮＝栗山文昭教授、片山みゆき講師、横山琢哉講師 東京カテドラル 聖マリア大聖堂）が開催され、グレゴリオ聖歌からパッヘルベル、ブルックナーの宗教曲を歌い、大聖堂一杯に荘厳な響きが満ち溢れ、1年の締めくくりに相応しいコンサートとなりました⑥。



本学合唱団、柴田南雄生誕100年・ 没後20年記念演奏会に出演

昨年11月7日、サントリーホールで開催された、「柴田南雄生誕100年・没後20年記念演奏会～ゆく河の流れは絶えずして～」に本学合唱団が出演しました。

本公演は、指揮者、山田和樹氏の「次代につなぐ」という強い想いから企画され、日本フィルハーモニー交響楽団、東京混声合唱団、そして武蔵野音楽大学合唱団の共演により、シアターピース「追分節考」と交響曲「ゆく河の流れは絶えずして」が演奏されました。

柴田南雄の代表作である「ゆく河の流れは絶えずして」は壮大な作品であり、

演奏会で取り上げられる機会が少なく、今回は27年ぶりの再演でした。

両作品とも合唱団メンバー個々が客席内を歌いながら練り歩き、時に立ち止まって朗誦するなど、大変斬新な作品ですが、本学合唱団は栗山文昭教授、片山みゆき講師の指導のもと、自発的な動きと素晴らしい演奏で柴田作品の魅力を十分に引き出し、満員の聴衆から盛大な拍手をいただきました。

当公演はNHKによる収録(放映は本年2月を予定)と併せて、CD化のためのライブ録音も行われました。



幼稚園・音楽教室ウェブサイトリニューアル

昨秋、武蔵野音楽大学附属幼稚園と附属音楽教室のウェブサイトを更新しました。両サイトとも、より見やすくなるよう情報を整理し、レイアウトやデザインを一新しました。また、各ページでは写真を多く取り入れ、子どもたちの生き生きとした豊かな表情が見られます。

第一・第二・武蔵野各幼稚園の新サイトは、明るくやわらかなオレンジ色をベースに、かわいらしいイラストをアイコンに使うなど、親しみやすいデザインに仕上げられています。さらに、新しいコンテンツ「園からのお便り」を設け、日々の保育や楽しい催しの様子を随時お



届けします。一方、音楽教室のリニューアルでは、品のあるベージュの色調を採用。トップページには、各コース案内等基本的な情報のバナーを大きくシンプルにならべ、訪問者が知りたい情報に簡単にアクセスできるよう工夫しました。

一層充実した幼稚園、音楽教室のウェブサイトをぜひご覧ください。

URL 幼稚園 <http://kindergarten.musashino-music.ac.jp/>
音楽教室 http://music_school.musashino-music.ac.jp/

表紙の顔



田代愼之介さん

北海道出身。東京藝術大学音楽学部器楽科を経て、1987年同大学大学院音楽研究科修士課程修了、クロイツァー賞を受賞。1984～1986年、ハンガリー政府給費留学生としてリスト音楽院にて研鑽を積み、これまでに松浦豊明、ペーター・ショイモシュ、ゲオルク・ヴァンヤヘーリ等の諸氏に師事しました。

1975年第29回全日本学生音楽コンクール中学の部全国第1位。大学在学中、モーニングコンサートにて藝大フィルと協演、大学院在学中には、第52回日本音楽コンクール入選、海外派遣コンクール河合賞を受賞、日演連推薦演奏会にて札幌と協演しました。1985年エビナル国際ピアノコンクール、1986年マリア・カナルス国際音楽コンクールで上位入賞をしています。以降、札幌と東京にて定期的にリサイタルを重ね、各地での演奏会やNHK-FMに出演、武蔵野音楽大学学園祭招待演奏には3度登場し、1995年には札幌、2004年には北海道交響楽団と協演しました。また、20年以上に渡りPTNA ピアノコンペティション課題曲セミナーを全国各地で行い、課題曲CDにも多くの録音を残し、2016年にはJPTA ピアノオーディション予選課題曲による公開講座を担当しました。

これまでにCD「バルトーク ピアノ曲集Ⅰ、Ⅱ」、「リスト ピアノ作品選集」をリリースしていずれも好評を博し、楽譜「バルトーク舞曲集」校訂・解説や雑誌「ショパン」への寄稿、全日本学生音楽コンクール、PTNA ピアノコンペティション等の審査員を務めるなど幅広く活動しています。

現在、武蔵野音楽大学教授、器楽学科長。東京藝術大学非常勤講師。

【今後の予定】

●リサイタル

- 8月29日(火) 札幌コンサートホール Kitara 小ホール
- 9月5日(火) 東京文化会館小ホール

●PTNA ピアノコンペティション

課題曲説明会・セミナー

- 3月1日(火) 東京 第一生命ホール
- 3月15日(水) 富山 楽器センター富山
- 3月24日(金) 札幌 エルムホール
- 3月27日(月) 柳川 小川楽器柳川店ホール

入間キャンパスでミューズフェスティバル開催

木々が色づき始めた入間キャンパスで、10月21日から23日の3日間、平成28年度ミューズフェスティバルが開催されました。

武蔵野音楽大学は、平成29年4月から江古田新キャンパスに全学年が統合され、学生たちの学友会組織もひとつになります。これまで入間・江古田キャンパスそれぞれで開催されてきたフェスティバルも、入間では第41回、江古田では第61回を数える今年度の開催が、区切りとなります。

これまでの感謝の気持ちを贈りたいとの意味を込め、今年のテーマは「GIFT」としました。学生たちは、仲間達との演奏やクラブ活動の発表①で、日頃の研鑽の成果を披露する他、クラブ・サークル・楽器会等による模擬店②や展示などを通して、入間キャンパスでの学びや出会った学友たち、関係者の方々に感謝を込めて、フェスティバルを盛り上げました。

また、高等学校ではクラスの催し、専攻別アンサンブル発表③、音楽教室

では演奏会、幼稚園の展示④など、それぞれが工夫を凝らした催しでフェスティバルに彩りを添え、訪れた方々を楽しませました。

多くの卒業生も集い、学生・教職員と入間キャンパスの生活を懐かしみ、来年度から始まる江古田新キャンパスに思いを馳せながら、盛況のうちにフェスティバルは幕を降ろしました。



栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

- 瑞宝中綬章受章 丸山徹薫(昭和31年大学ピアノ専攻卒業、本学理事・名誉教授)
- 平成28年度北海道文化賞受賞 三部安紀子(昭和41年大学声楽専攻卒業)
- 第6回マリア・エレロ国際ピアノコンクール(スペイン) シニアカテゴリー 第2位入賞
奥村奈々(平成25年大学ピアノ専攻卒業、本大学院修了)
- 第17回スペイン作曲家国際ピアノコンクール(スペイン) スペイン音楽特別賞受賞
奥村奈々(平成25年大学ピアノ専攻卒業、本大学院修了)
- 第7回ドヴォルザーク国際作曲コンクール(チェコ) 特別賞 The best religious vocal music 受賞
平野真奈(平成22年大学ピアノ専攻卒業)
- 第29回東京国際映画祭 日本映画スプラッシュ部門において作品「プールサイドマン」(製作総指揮・音楽監督)が作品賞受賞
渡辺雄司(平成21年大学ピアノ専攻卒業)
- 第68回福岡県音楽コンクール ハープ部門 知事賞受賞(最高位) 三谷真珠子(大学4年ハープ専攻)、●第66回ヘレン・ケラー記念音楽コンクール 器楽部門 弦楽器の部 第1位入賞 株竹大智(大学2年ヴァイオリン専攻)、●第24回ヤングアーティストピアノコンクール ピアノ協奏曲部門 シニアグループ 金賞受賞 鈴木絢子(本大学院博士課程2年)、ピアノ独奏部門 Fグループ 銅賞受賞 乗田晏妙(大学2年ピアノ専攻、附属高校卒業)、●第10回横浜国際音楽コンクール 弦楽器部門 大学の部 第1位入賞 三谷真珠子(大学4年ハープ専攻)、声楽部門 大学の部 第3位入賞(1、2位なし) 清水智紗子(大学4年声楽専攻)、ピアノ協奏曲部門 第3位入賞(1、2位なし) 鈴木絢子(本大学院博士課程2年)、ピアノ部門 一般Aの部 第2位入賞 在原優果(大学2年ピアノ専攻)、●第26回日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ホルン部門 大学の部 第3位入賞(1、2位なし) 山田実優(大学4年ホルン専攻)、●第21回JILA音楽コンクール マリimba部門 第2位入賞(1位なし) 古家啓史(平成28年大学マリimba専攻卒業、附属高校卒業)、第3位入賞(1位なし) 松岩沙季(平成28年大学マリimba専攻卒業)、声楽部門 第3位入賞(1位なし) 渡邊絵美子(平成21年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)、●第25回ちば音楽コンクール F部門(大学生・一般) 第2位入賞 在原優果(大学2年ピアノ専攻)、●第18回日本演奏家コンクール ピアノ部門 一般Aの部 第2位入賞 清水弘治(平成25年大学ピアノ専攻卒業、本大学院修了)、●第17回大阪国際音楽コンクール 声楽部門 Age-G 歌曲コース 第3位入賞(1、2位なし) 秋津 緑(平成20年大学声楽専攻卒業、本大学院修了、本大学院博士課程修了)、●第4回あおい音楽コンクール ピアノ部門 大学生A1 第3位入賞(2位なし) 當間舞(大学2年ピアノ専攻、附属高校卒業)、●第3回国際ピアノ伴奏コンクール 第3位入賞 竹内優香(平成28年大学ピアノ専攻卒業、本大学院1年)、●第85回日本音楽コンクール 委員会特別賞受賞(オーボエ伴奏者) 大野瑞穂(平成15年大学ピアノ専攻卒業、本大学院修了)、●公益財団法人滋賀県文化振興事業団 第46回滋賀県芸術文化祭奨励賞受賞、演奏会出演 秋津 緑(平成20年大学声楽専攻卒業、本大学院修了、本大学院博士課程修了)

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

※ご芳名(五十音順)は、平成28年8月1日から10月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、ご寄附いただけるようになりました。クレジットカード決済により簡単に手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】井上敏子様 岩田恵子様 大庭はる美様 景山一恵様 川辺章子様 栗原恵子様 小石 晋様 志賀訓子様 重田英年様 周藤みのり様 菖蒲沢真知子様 鈴木富江様 千葉宣子様 鳥飼眞喜子様 中山千津様 橋本良子様 古市美子様 古川薫子様 本間敬二様 宮田武久様 森永美保様 山岸めぐみ様 山崎ひろ子様 吉田厚子様 芳野京子様 AKIKO PIANO音楽教室様 平成14年度入学生卒業10周年同期会様

【在学生・同ご父母】伊勢福修司様 川島恵子様 中村彰夫様 山口達之様 渡辺悟志様

【役員・教職員・一般・他】青木夕華様 古池 好様 國府方未奈様 子安 茂様 坂下 寛様 坂下裕子様 佐藤しのぶ様 関根弘美様 寺本まり子様 野口公子様 堀田公子様 堀田健介様 前原信子様 渡邊公実子様 (他に匿名を希望される方14名)

平成29年度 学生・生徒募集のお知らせ(入学試験日程)

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

大学院博士 後期課程入試	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
音楽学・音楽教育	平成29年 2月1日(火)～10日(金) 消印	郵送のみ	平成29年 2月22日(火)・23日(水)
器楽・声楽・作曲	平成29年 2月1日(火)～10日(金) 消印	郵送のみ	平成29年 3月9日(火)～11日(水)

武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
1年次 一般入試 A日程	平成29年1月16日(月) 消印 ～30日(月) 消印	平成29年 1月28日(土)・30日(月)	平成29年 2月18日(土)～22日(火)
1年次 一般入試 B日程	平成29年2月23日(水) 消印 ～3月2日(火) 必着	平成29年3月3日(金)	平成29年 3月6日(月)～8日(水)
1年次 一般入試 C日程	平成29年3月7日(火) 消印 ～13日(月) 必着	平成29年3月14日(火)	平成29年 3月16日(木)～18日(土)
3年次 編・転入学入試	平成29年1月16日(月) 消印 ～23日(月) 消印	郵送のみ	平成29年 2月10日(金)～12日(日)

●一般入試A日程およびB・C日程の受験では、国語・英語について、大学入試センター試験を利用できます。

武蔵野音楽大学(別科)

別科入試	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
別科入試	平成29年1月20日(金) ～27日(金) 消印	郵送のみ	平成29年 2月10日(金)・11日(土・祝)

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
附属高等学校 推薦入試	平成29年1月10日(火) ～16日(月) 必着	郵送のみ	平成29年1月22日(日)
附属高等学校 一般入試A	平成29年1月23日(月) ～30日(月) 消印	郵送のみ	平成29年2月10日(金)
附属高等学校 一般入試B	平成29年3月2日(火) ～9日(火) 必着	郵送のみ	平成29年3月16日(木)

入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。

【会 場】武蔵野音楽大学入間キャンパス

【要項請求】各入学試験要項は、入間キャンパスで取り扱っています。郵送をご希望の方(平成29年度受験対象者)には、無料でお送りします。本大学ウェブサイトの資料請求フォームからご請求ください。大学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/> お電話にてご請求の場合は、氏名、住所、電話番号、および高校、大学1年次、大学3年次、大学院、別科の別をお知らせください。武蔵野音楽大学企画部広報課 TEL.04-2936-9737

【お問合せ】武蔵野音楽大学入学試験事務局 TEL.04-2936-9781

音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

【前期入室試験】平成29年2月26日(日)

各音楽教室で実施 ※エクセレンスコースは江古田音楽教室で行います。

【願 書 受 付】平成29年1月25日(火)～2月18日(土) ※日曜・祝日を除く

*入室試験の詳細については、平成29年度音楽教室のご案内(生徒募集要項)でご確認ください。要項は各音楽教室で取り扱っております。音楽教室ウェブサイトの資料請求フォームからご請求いただけます(送料無料)。

その他詳細については、下記へお問い合わせください。

■江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 ■入間音楽教室 TEL.04-2932-1111

■多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

★New★音楽教室ウェブサイト http://music_school.musashino-music.ac.jp/

◆平成29年度よりコースをリニューアルします

ブレイクコース	3歳
スタンダードコース	4歳～高等学校2年生
レッスンコース	小学校6年生～高等学校2年生
ソルフェージュコース	4歳～高等学校2年生
受験コース(大学志望)	中学校3年生～高等学校3年生
エクセレンスコース(江古田音楽教室のみ設置)	5歳～高等学校2年生

※受験可能な年齢・学年(平成29年3月末現在)

編集 後記

今回の巻頭をお願いした藤谷治さんの小説『船に乗れ!』は、中年にさしかかった主人公・サトルが高校時代を回想するというスタイルで物語が展開します。さて、30年、40年後に皆さんが武蔵野時代を振り返ったとき、どのような想いが胸をよぎるのでしょうか。上手く行ったことも、行かな

かったこともあるでしょう。でも、色々あったけれど、とりえず「頑張った」と自信をもって言えるように今を大切に過ごしたいものです。

2017年を迎え、4月にはいよいよ江古田新キャンパスがオープンします。さあ、新しい船に乗り、夢に向かって漕ぎ出しましょう(編)。

箏

畑 盛次作 1846年(弘化3年) 日本 全長192cm

すっきりとした外見の現代の箏とは対照的で、絢爛豪華な装飾で彩られた飾り箏は江戸時代中期以降に発達した。このような美しい装飾が施された日本の楽器は、一般的に美術館などで「美術工芸」として扱われていることが多い。そこで今回は楽器の装飾に焦点をあてて、この写真の楽器の魅力に迫りたいと思う。

まず一番目をひくのは、楽器の両側面に施された草花の金蒔絵であろうか。紫檀材を薄く貼った上に、松・梅・土筆・蕨・れんげ・たんぽぽ・すみれ・百合・牡丹・葦・藤袴・菊・すすき・女郎花・萩・桔梗・南天・水仙という18種類の草花が春夏秋冬の順番で描かれている。附属の象牙製箏柱にも同じく四季の草花や生き物が描かれている①。

箏頭部側面の龍舌の周りは源氏香の紋様で縁どられて、洗練された格調高さを漂わせている②。源氏香とは江戸時代初期に完成した優雅な香文化のひとつで、何種類かの香木を組み合わせることでその異同を競い合う組香の一種である。源氏香の場合、5種類の香木の異同を競い、5本の縦線に同香のもの同士を横線で結ぶ。全部で52通

りになるこの組み合わせには、源氏物語54帖のうち巻頭「桐壺」と巻末「夢浮橋」を除いた52帖全てが結びついており、各々の記号には巻名がつけられている。この香文化が生んだ縦と横だけで表した記号紋様は、意匠のもつ単純性と抽象性が日本人の嗜好と合い、また古典文学と結びついているという奥深さの点でも好まれたのであろう。江戸中期以降庶民に広く愛され、和菓子や着物の図柄、浮世絵、建築、工芸など様々な分野の作品に取り入れられている紋様なのである。

また、頭部上面の玉戸^{たまど}周囲は、象牙象嵌・木画技法の繊細な八段飾りが施され、中央には彫金で玉取り龍がつけられている②。さらに箏の尾部にはべつ甲の上に横笛を吹く奏楽飛天が描かれている③。日本人の美的感性と江戸職人の匠の技が凝縮されている誠に贅をつくした名品である。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)



大学機能の一時移転のお知らせ

武蔵野音楽大学は、現在進行中の「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」に伴う新築工事のために、平成29年3月まで大学の機能を入間キャンパスに移転しています。期間中は何かとご迷惑、ご不便をおかけいたしますが、ご理解いただきますようお願い申し上げます。

❖目次❖

謹賀新年 福井直敬	①
芸術と才能と運命 藤谷 治	②
卒業生の留学ライフ 美しい人生のために、今すべきこと 鳥谷尚子	⑥
音楽の万華鏡 拍子 薦田治子	⑧
江古田新キャンパスプロジェクト REPORT ⑪	⑨
竣工に向けラストスパート！	
MUSASHINO NEWS	⑪
❖ 多彩な音楽、多彩な感動、秋の演奏会	
❖ 本学合唱団、柴田南雄生誕100年・没後20年記念演奏会に出演	
❖ 幼稚園・音楽教室ウェブサイトリニューアル	
❖ 入間キャンパスでミュージックフェスティバル開催	
❖ 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）	
❖ 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々	
❖ 平成29年度 学生・生徒募集のお知らせ（入学試験日程）	
❖ 音楽教室（江古田・入間・多摩）生徒募集のお知らせ	

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖発行❖



学校法人 武蔵野音楽学園

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）

バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2017年1月10日発行 通巻第120号